

---

# 王子様は吸血鬼

風邪布名論

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王子様は吸血鬼

### 【NZコード】

N7073M

### 【作者名】

風邪布名論

### 【あらすじ】

ある日の晩、妄想癖で苦しむ女子大生、いじわらしきさゆみ石崎沙由美のもとに一人の吸血鬼がやってきた。

彼の名は、キヤロル・ヴァンドリー、由緒正しき吸血鬼家の正當後継者だった。だが、美味しい血を求めて、彼女の家に忍び込んだことで

キヤロルは沙由美と運命的な出会いをとげる。

これはそんな一人の愛（？）をつづった感動の（？？？）物語である。

## 血の契約

7月3日（土曜日）午前2時。

すべての生物が活動を停止し、眠りについた頃。  
真っ暗なアパートの一室で、黒いマントを羽織つた一人の男が、無  
邪気に眠る少女に馬乗りに  
なり、その首筋に白い牙を突き立てていた

彼の名はキャロル・ヴァンドリー。  
いわずと知れた吸血鬼だ。

「フツ。 可愛い寝顔だ。 それでは、 そろそろ  
ディナーといこうかな？」

ザクッ。

鋭い牙が柔らかい首筋に突き刺さる。

「ん……。」

痛さとそれに伴う快感で、惱ましげな声をあげる少女。 キュートな  
ピンクのつま先が、なにかを  
こらえるように白いシーツを掴む。

「ヘッ ヘッ ヘッ、 どうだオレの牙は？」

だが、その直後、なぜか血を吸つたキャロルの

方が先に苦しみ始めた

「ん？」「ひ……、おえつ、まづつ。」

キヤロルは両手で口を押さえて、ベッドから転がり落ちると、あわててゴミ箱に駆け寄り、吸つた血を吐き始める。

「ゲホツ、ゲホツ、ゲホツ。」

すると、せつきまでスヤスヤと眠っていた少女が突然バサツと布団を蹴り上げ、飛び起きた。

「だ、だれっ？」

「ちつ、氣づかれたか。」

キヤロルはあわてて窓を開けて、逃げようとするが、今度は血を吐きすぎて、へなへなとその場に倒れてしまった。

やがて、ゆつくつと部屋の明かりがつく。

「ちつ、誰よつ？」

少女はキヤロルの姿を発見すると、青ざめた顔で慌てて壁際へと擦り寄った。

「あ、怪しい者じゃないんだ」

「……。」

「つて言つても信じないよね？」

「クリと首を縦に振る少女。

「じゃあ、正直にいうよ。オレはドラキュラだ。」

「ドラキュラ？」

「ああ、オレは人の血を吸つて生きてる吸血鬼だ。」  
そういうて、元気な時ならガバッと少女に襲いかかるのだが、今のキャロルは空腹のあまり、極度の虚脱状態になつていた。

「吸血鬼ッ？ てことは私の血を吸いに来たの？」

「ああ、その予定だつた。だが予定が狂つた。君の血はあまりにマズ過ぎた。」

「どうこう意味よ？」

ふくれつ面で、両手を腰に当てる少女。だがキャロルのただならぬ様子を見て、心配そうに声をかける。

「ていうかホントに大丈夫なの？」

「ああ、軽い貧血だ。心配はいらん。」

「ドラキュラが貧血って……。」「

そういうて少女は大きくため息をつくと、トタトタと台所にいつて、赤い水を注いだコップを持って帰ってきた。

「飲んで。」

「なんだコレ?」

「いいからいいから。」

少女にそう言われて、仕方なくコップを口に運ぶキャラル。だがそれを口に含んだ瞬間、一気に中身を吐き出した。

ブー――ツ。

「なんだコレ?」

「ケチャップ水よ。水にケチャップを溶かしたの。」

「なに飲ませてんだつ? 殺す氣かつ。つーかこんなモン、人間でも飲めねーよ。」

「なによ血と同じ赤い液体じゃない? なにが気に食わないの?」

「オレは赤い液体が飲みたいんじゃない、血が飲みたいんだ。うつ……。」

だがそこまで言つたところで、キヤロルは再び貧血を悪化させて倒れてしまった。

少女はキャロルのそばに駆け寄ると、キャロルの上半身を抱き起す。

「そんなに血が吸いたいの？」

うつろな目で少女を見つめるギャロル。

一  
ああ

「じゃあ、私の血を吸う？」

しかし、今度はあつくりと首を横に振る。

「それはイヤだ。

アンタねー、好き嫌いはつかないでちやだめよ。

「君の血は青汁の味がする」

「『じちや』『じちや』いつてないで早く吸いなさい。  
死んだら元も子もないわよ。」

「チツ、わかつたよ。」

そういうつて、キヤロルは少女の腕を強引に引っ張ると、背後から抱きつき、鋭い牙を首にあてて、優しくつぶやく。

「いただきまーす。」

ザクッ。

「待つて、私にも心の準備が。あ……。」

だが、キャロルの牙が深く首筋に食い込むと、少女の瞳は突然うつろになり、バタバタと抵抗を続けていた足もゆっくりと動きを止める。

そして、力強い腕の中で、少女の体はバターのようにドロドロと溶けていく。

かすかに漏れる吐息。

汗ばんだシャツ。

重なり合つ一つの鼓動。

ちゅぱちゅぱ。

「ん……。」「

やがて少女の血は、鋭い牙を通して、ゆっくりとキャロルの喉元へと到達した。

ひとしきり行為を終えた二人は、狭い部屋の中で、お互いのことを語り合っていた。

「私、石崎沙由美 20歳、

いま 大学に通つてゐる。下宿だけだね。  
あなたは?」

「オレ？ オレはキャロル・ヴァンドリー。泣く子も黙る吸血鬼族の跡取り息子さ。年齢はそつだなー、人間で言つと20歳ぐらいか。」

そういうて赤茶色のウルフカットの髪をかきむしるキャロル。その色は蛍光灯に照らされると、一段と赤みを増して見えた。

「とにかく、そんな吸血鬼さんが、なんでこんな夜中に？」

「別に何の用つてこともない。オレたちはいつも 眠りについた世界の女性から血を頂いている。

今日はたまたま見つかっただけだ。」

「へーそつなんだ。私、てつきり下着泥棒かと思つちやつた。」

「下着ドロ？」

キャロルが思わず首をひねる。

「うん、このじろ私の下着がよく無くなるの。パンツとかブラジャーとか。」

「おいおい、よくそんな酷いことを言つてくれるな。オレはただ、君から血をもらひにきただけだぜ。」

「それ、もつと酷くない？」

そういうつて呆れた表情を作る沙由美を無視して、  
キヤロルは話を続ける。

「それよりもだ。君の血はいつたにどうなってる んだ？ めちゃくちゃ変な味がしたぞ。今まで いろんな女性の血を吸つてきたが、こんな汚い 血は初めてだ。」

「あなたこそ、よくそんなことが言えるわね？ 命の恩人に向かつて。」

「誰が命の恩人だ？ そもそも最初に君の血を吸わなければ、あんなことにはならなかつた。何か変なモノを食つてるんじゃないのか？」

そういうつてキヤロルは冷蔵庫の前に行くと、重い扉を開けた。  
ガチャ。

「ちょっと一勝手に開けないでよ。」

「別にいいだろ？」

「もう。」

だが、オレンジ色のランプが灯つた冷蔵庫の中には、マヨネーズとケチャップが三本ずつ置いてあるだけだ。

それを見て呆然とするキヤロル。

「なんじや じりや？」

「マヨネーズとケチャップです。」

「それは見ればわかる。」

「じゃあ、何も問題ないじゃない。」

「大アリだ。つーかなんで冷蔵庫の中にマヨネーズとケチャップしか入っていないんだ？」

キヤロルの執拗な問い合わせに、沙由美はややキレ気味に応える。

「マヨラーだからよ。それにこぎつて時には、非常食にもなるじ。

」

「非常食？」

「アリヒよ、いひあるの。」

あると沙由美は、冷蔵庫からマヨネーズを引っ張り出してローリーへわえると、一気に中身を吸い始めた。  
ちゅーーーーーー。

それを見て、慌ててマヨネーズを取り上げる  
キヤロル。

「止めろひ、気持ち悪い。早死にするだ。」

「つるさいわね。ドラキュラに言われたかない わ。」

「だから」<sup>1</sup>んだ。オレの仲間が誤つて君の血を吸つて、オレと同じような日にあつたらどうするんだ?」

「何の心配してんのよ? それに私、アンタたちのために<sup>2</sup>飯食べてるんじやないからね。」

「一体これのど<sup>3</sup>がメシなんだ?」

そういうて一定の距離を置いて、睨み合つ一人。やがて、数秒後、キャロルが重い口を開く。

「<sup>4</sup>んなもんばかり食べてたら、太るぞ。」

「えつ?」

その言葉に、石像のように固まる沙由美。

「太るつたつて……。」

「それだけじゃない。オレのいた村には、太り過ぎたせいで、死んでしまったヤツまでいる。」

「吸血鬼なのに?」

「ああ、そうだ。ハリソンという30過ぎの男だつたんだが。そいつは昔からカロリーの高い人間の血が好きでね、毎日、何リットルもの血をガブガブと飲んでいた。

だが、それでも周囲はそんな彼を止めなかつた オレ達は血さえ吸つていれば、死ぬことはない とタカをくくつていたからだ。だが、そんなある日。」

キヤロルの真剣な表情に、沙由美がゴクリと唾を飲み込む。

「ヤツはメタボになつていた。」

「なにそれ？」

啞然とする沙由美。だがキヤロルは真面目な顔で話を続ける。

「メタボと聞いて、君は笑つただろう？ だが、悔つてはいけない。吸血鬼にとって、メタボになることは致命傷だつたんだ。」

「どうしてよ？」

「棺桶のフタが閉まらないからだ。」

「……？」

「我々、吸血鬼は、日光を浴びたら死んでしまう。だから、自分の棺桶のフタが閉まらないと いうことは直接的な死を意味するんだ。」

「そんなオーバーな。」

「だが、被害はそれだけでは收まらなかつた。」

ハリソンの恋人であるジョーンとマーガレット が、彼を助けようと、自ら棺桶のフタとなつて、直射日光に当たつて死んだんだ。」

「ハリソン一股かけてたの？ ていうかフタになる以外に他に方法あるでしょ？」

だが、沙由美の鋭い指摘にもに聽することなく、話を続けるキャロル。

「しかし、依然としてハリソンの腹は引っ込まなかつた。そのため、彼を守ろうとした両親やは皆、次々に棺桶のフタとなつて死んでいった。そしてとうとう、すべての

身代わりを失つた彼は直射日光に当たり、灰になつた。」

「ふーん。」

「どうだ、メタボの怖さが分かつただろ。」

「メタボの怖さはよくわからないけど、吸血鬼がアホだつていうのはよくわかつたわ。」

キャロルは「ホンと大きな咳をすると話を続けた。

「とにかくだ。こんなものばかり食べていたら、体に悪い。オレが料理を作つてやる。」

「いいよ、もうこんな時間だし。」

「気にするな。血をむりたんだ。それぐらいは わせてもいい。」

「ホントに?」

「ああ。遠慮はいらんぞ。なんでも言つてくれ

沙由美はしづらくなれ込んだあと、ゆっくりとした口調で、キヤロルにオーダーを通した

「それじゃピーフストロガノフと、フカヒレのスープで。」

「おこ、ホントに遠慮ねーな、この女は。」

沙由美の住んでるアパートの近くには、ダイヒイとつづく4時間営業のスーパー・マーケットがある。キヤロルは沙由美に描いてもらった地図を片手に無事そのスーパーまでやってきた。

ウイーン。

ゆっくりと開く自動ドア。

「こりゃしゃいまぐ。」

すると、ビニからが眠たそうな店員の声が聞こえてくる。

「やっぱ人間は夜は寝なきゃダメだな。」

そういうて、ブツブツと独り言をいうとキャロルはつかつかと店内に入つていく。

店内は、BGMにのしかかっているものの、夜間営業のためか、若干照明が薄暗く、客の入りもまばらだ。

だが、そんな状況でも、タキシードにマントを羽織ったキャロルの姿はひときわ目を引いた。誰もがすれ違いざまに、驚きの表情で振り返る。

「なにあの人？」

「パーティの帰りだろ？」

しかし、そんなことはお構いなしにマイペースで買い物を続けるキャロル。

「あとは牛乳か。」

十分後、緑色のカゴには山盛りの食材がつまっていた。

「これでよしと。」

キャロルはそれを持ってレジの前に立つとカウンターからアナウン

スが流れた。

「少々お待ちください。」

すると十秒後、エプロン姿の男が駆け足でやってくる

「お待たせしました。」

男は深く頭を下げるが、早速、片方のカゴに入った商品をレジに通して、もう片方のカゴに移動させていく。

そしてレジの電光掲示板には、緑色のキレイな文字で、買った商品の金額が順番に合計されていった。

1980円。

2220円。

2554円。

だが、それを眺めてじるつり、「キャロルはあることに気づいた。

「しまった、金がない。」

突然の告白に、レジを打つ男の手が止まる。

二人の間に流れる氣まずい雰囲気。

だが、満を持して店員が尋ねる。

「どうします?」

「すまない。ちょっと家まで金をとってくる。」

「じゃあ、これば？」

「置っこてくれ、すぐ戻るから。だが、もし勝手に商品を棚に戻してみる、思いつきつ前 の血を吸つてやるからな。」

そう言つて、もはや頼んでこるのが躊躇してこらのかもわからなこよつた。一方で店員に釘をさすとキャロルは駆け足で店を出た。

空は少しずつ明け始めていた。

「まあこな。」

キャロルは背中のマントを広げると、ゆっくりと浮かび上がった。

沙由美の家までは直線距離で五メートルほどだ。

「よし、こへだ。」

ビローン。

風を切るマント。

周囲の景色が一斉に飛び込んでもくる。

そしてその5秒後。

キャロルは一気に沙由美が住む一階のベランダにたどり着いた。

スタッ。

「おいつ、沙由美、金をくれつ。」

ガラス越しにそう呼びかける。

だが、沙由美の部屋はなぜか大きな炎に包まれていた。  
メラメラと燃える室内。

「なんじゅ いりゅ ？」

キヤロルは慌てて窓ガラスを開けて、部屋の中に入ると、沙由美を抱き起こして、頬をたたく。

「おい、しっかりしろ。どうしたんだ？」

だが、返事はない。

「チツ、くそつ。」

キヤロルは沙由美の体を持ち上げて、ベランダの外まで連れて行くと、燃え上がる炎に自分のマントをかぶせた。

シュウウウ。

数分後

ゆづくりとキヤロルの腕の中で、目を覚ます沙由美。

「う……ん。」

だが、周囲の状況を確認すると、沙由美は慌ててキャロルを突き飛ばし、飛び起きた。

「こきなり何をするの？」「

「それはこっちのセリフだ。それになんだこの状況は？」

「ただのボヤよ。」

「火事の種類を聞いてるんじゃない。なんで家が燃えているのかと聞いてるんだ。」

「あー、なんだそいつ」とか。それなら話は簡単よ。犯人はアイツ。」

そういうて、沙由美は部屋の隅にある『もつまいも』と書かれたダンボールを指差した。

「犯人？」

「そうよ。実家から送られてきたサツマイモの箱をみていくうちに、私は無性に焼き芋が食べたくなつた。するとその時、突然、テーブルの上にサツマイモの精霊が舞い降りたの。」

「なんじゃそりや。」

「そして、彼女は初対面にも関わらず、空腹の私に優しく微笑むと、サツマイモに変身して、私の目の前に転

がつたの。紫色の見事なボディ に甘い香り。衝動に駆られた私は、思わず

よだれを垂らしながら、近くにあつたライター で彼女に火をついた。そういうわけ。」

「わかんねーよ。どんな幻覚つ！？ つーか  
やっぱ犯人はお前じゃねーか。」

キヤロルはやれやれといった感じで、火消しに  
使つたマントを拾い上げると、ゆっくりと背中に羽織つた。

「とにかく。無事でよかつた。」

「なに？ 心配してくれたの？」

「当たり前だろ。」

「どうして？」

「どうしてって、そりゃ誰だって心配するだろ う？」

キヤロルは顔を真っ赤にして、うつむき加減に  
応える。

「放つておけるわけないだろ。」

「他人なのに？」

「ああ。他人でもだ。」

そうじつて再び見つめあつ一人。やがてキャロルが口を開く。

「つーかどうしてくれんだよこのマント。コレがないと帰れないんだぞ。」

だが、穴の開いたマントをつけた、ぐるりと回るキャロルを見て、沙由美は大きな声を上げて笑い始めた。

「フフフ……。」めん。

「笑い」とじゃないぞ。

「だつて、フフフ。」

やがて、沙由美の笑い声はキャロルにも伝染した。

「ひひ笑うなつて。」

「フフフ。」

「ハハハハハ。」

そして、沙由美がゆづくつとキャロルの耳元でわわわいた。

「じばじばくちにしてもこよ。」

「えつ?」

だが、すぐに頬を赤く染めて、首を横に振る  
キャロル。

「そ、そんな」と出来るわけないだろ。」

「でも、マントが破れてたら帰れないんでしょう？」

「そりゃね、うだね。」

「マントは私が直してあげるから。それに私と  
いれば、しばらぐの間、血には困らない  
でしょ。」

「だけど、オレは沙由美に何をすればいいんだ？」

「かんたん。」

そういって、沙由美は細い腕をキャロルの腰に  
回すと、たくましい胸に顔をうずめた。

「夜の闇が深い時、こうして欲しい、それ  
だけ。」

すると今度は、キャロルの腕が小さな沙由美の  
体をグッと抱きしめる。

「なるほど、それは簡単だな。でもそれだけで  
いいのか？」

そして、キャロルはそのまま沙由美をベッドに

押し倒した。

「あやし。」

「あやし。」

ベジتاの上で絡み合ひの指と指。

沙由美の耳にキャロルの甘い吐息がかかる。

「それじゃ、早速、いただきます。」

「うわー、やつを血あげたばっかじやない?」

「あれば挨拶がわりだろ。」

「なによ、やどざと不味いってこいつたせこ。あ……。」

だが、キャロルが沙由美の首筋を刺激すると、  
急に優しく声に変わる。

「わへ、わへつき。」

そして、沙由美の細い指がゅつべつとキャロルの髪をなでると、一

つの髪はやがて闇の中で激しく混ざつ合つた。

一方、そのころ、スーパーダイエイでは。

キャロルの再来店に備えて、商品を山積みにしたカゴが店内にむなし置き去りにされていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7073m/>

---

王子様は吸血鬼

2010年10月10日01時40分発行